

訪問日：2017.8.30 / エリア：京都

社会福祉法人こころの家族 故郷の家・京都



左より) 金さん、梁本さん、李さん、金井さん

回答者
梁本 浩子さん(特別養護老人ホーム故郷の家・京都施設長)
李 守陳さん(特別養護老人ホーム故郷の家・京都副施設長)
金井 忠司さん(特別養護老人ホーム故郷の家・京都総務課長)
金 滋榮さん(ショートステイ故郷の家・京都相談員)

活動の経緯

韓国木浦の孤児院「共生園」で、生涯を3,000人以上の孤児を育てた田内千鶴子(韓国名:ユンハッチャ)は、亡くなる前に日本語で梅干しが食べたいという言葉を残しました。その遺志を継いだ息子の基は、約30年前に在日コリアンの孤独死を契機に、多くの方から支援をいただき、堺市に、その後大阪市、神戸市、京都市、東京都で故郷の家をつくり、当法人での理事長を務めています。

故郷を思う心は同じという考えのもと、在日コリアンと日本人が共に生き、日本はいい国だと思える社会づくりを目指しています。2017年の現状で、在日コリアンと日本人の利用者割合は約7:3となっています。

「故郷の家・京都」では韓国からのソーシャルワーカーがスタッフとして働いています。堺・大阪・神戸・東京を含む法人全体で15人程です。また、2016年10月に完成した「故郷の家・東京」には、留学生のアルバイトもいます。認知症などで、最近のできごとを忘れてしまい、韓国語でお話しされる利用者さんもいらっしゃいます。

日本に来られた理由は様々ですが、大正から昭和はじめに多くの方が来られたと思われれます。京都には約33,000人の在日コリアンがおられる中、65歳以上の高齢者は、5,000人程と言われています。故郷から遠く離れた在日コリアンのために故郷の家があります。今年5月、「故郷の家・京都」は開設して9年になりました。アリランを歌い、チャンゴを叩き、楽しく過ごされています。

「故郷の家・京都」の敷地は、もともと任天堂の工場地でした。鴨川の河川、40番地などの整備が終わる頃に、故郷の家がこの地域にできました。

「故郷の家・京都」は新型老人ホームとして、個別ケアが可能なユニット型で、建物の建築デザインにもこだわり、扉や天井、

壁の装飾などは韓国を感じられるように施しています。また、生活をされている利用者さんの個室には住所を付けています。施設の全床にはオンドル(床暖房)を、共有スペースのリビングには靴を脱いでくつろげる畳部屋もあります。

地域との関わりについて

「故郷の家・京都」には、老人ホームとしては珍しく、「福祉は文化だ」という理事長の言葉のもとで文化スペースである雲史ホールを設けています。車椅子のままで約150の方が利用可能で地域の活動の場として、様々な団体に貸館しています。

先日、ホールでハンマダグン劇の公演がありました。太鼓の音で苦情が来たりはしません。外でサムルノリ(農楽から生まれた楽器のアンサンブルとダンス)もやっているし、地域の方々にも行事に参加していただき、一緒に楽しんでいただいています。それが地域に開かれた、地域の施設としての在り方だと思えます。

故郷の家で支援している文化活動について

元旦・初詣・もちつき・旧正月・節分・ひなまつり・花見・七夕・光復節・送り火・夏祭り・旧盆・のど自慢・コリアジャパンデイ・焼き芋大会・ファッションショー・三味線・カラオケ・お茶会・編み物教室・体操・フラダンス・お楽しみ会・ボランティア公演などの日韓の両国の文化を尊重するイベントや季節行事を開催しています。

この中で、一番盛大に開催しているのは、コリアジャパンデイです。開設記念祭で、法人内の各施設でも開催しています。ボランティアさんの公演、地域からの参加を主に開かれています。

また、職員自らのバンド結成や、韓国・日本の文化を取り入れた踊りや演奏を発表し、大好評でした。今年度はタルチュムという仮面劇でしたが、お面の色塗りなどは利用者さんの活動プログ

「この国に住む外国人が日本はいい国だといえる社会づくりを目指します」というスローガンのもと、高齢になり、介護を必要とされる在日コリアンの方々が故郷の香りに包まれながら日本人と共に生きる老人ホームづくりを行なっている。特別養護老人ホーム、ショートステイ、ケアハウス、デイサービス、訪問介護、在宅介護支援等の福祉サービスを提供している。

〒 601-8023
京都市南区東九条南松ノ木町 47
TEL: 075-691-4448
FAX: 075-691-4424

ラムに取り入れて、お面や衣装は全て手作りでした。ボランティアさんの公演も生まれ、支援しているスタッフが舞台上に上がる際には、利用者さんはとても喜ばれ一層盛り上がります。職員はこの日のために約3箇月前から業務の合間を縫って、練習を重ねて準備しています。

コリアジャパンデイには毎年違う内容で、利用者さんも一緒に参加して書道やちぎり絵などの展示作品づくりを行っています。

故郷の家には、文化生活支援員という専門スタッフがいて、利用者さんが日常生活をより良く、楽しく過ごされるよう、文化プログラムの支援を行っています。

文化的な支援としては大きく3つあります。まずは、日々の暮らしの中での文化、いわゆる生活風習を損なってほしくないという思いから、生活風習が一番現れている季節行事などのイベントを行なっています。その中から、作品づくりなどに発展することもあります。

次には、言語支援です。韓国語が話せる専門スタッフが手厚く支援を行っています。

最後に、食文化の支援です。梅干しとキムチのある老人ホームで、食文化の交流を通じて、どちらかに偏らず、両文化を尊重しながら一緒に楽しめるよう、これからも支援させていただきたいと思います。

1 鴨川と高瀬川に挟まれた松ノ木町40番地(現: 東松ノ木町)の略称。1920年代、当時国鉄の東海道線の工事や、東山トンネル工事、鴨川の護岸工事、九条通の拡幅工事などの大規模な土木工事や、京都の地場産業の一つである友禅染関係の染色工場が多くあり、その仕事に従事する多くの朝鮮人が住んでいた。

2 1986年東九条を中心に結成された民族文化を伝えるグループ。ハンマダンは「一つの広場」を意味し、演劇や音楽、教育などに携わる在日韓国・朝鮮人や日本人が、民族文化を伝え、表現を作り出す活動を行なっている。(参照: 東九条マダンウェブサイト)